

2010年  
12月13日  
月曜日

とある日の深夜。ゼミ生から一行だけのメールがきた。「人は何のために働くのでしょうか？」就活も終盤に差し掛かる頃だった。(まいつてるんやろか)あれこれ思案して返事を送った。「まず食べるため。自分が多少なりとも成長したと実感できる時、嬉しい。それから…」後で聞いたら、面接で訊かれてうまく答えられなかったので私に質問してみたらしい。(なーんや、紛らわしいな。)数カ月後、授業で卒業生をゲストに招いた。受講生からの質問…「お金を稼ぐ以外に働く意味はあるのか?」「仕事にやりがいはあるのか?」「哲学的?」とか不安そうな質問が続く。これから社会にでようとせん若者に多少の不安はつきものだが、同時にわくわくした気持ちもあるはずだ。しかし、わくわくは感じられない。彼らは、社会人デビュー

西村 智 准教授(労働経済学)

# 人は何のために働くのか ——資本主義社会における労働観と 企業の社会的責任——

を前に何かしら陰鬱な予感を抱いているのかもしれない、と思った。だから、あらためてゼミ生からもらった質問について考えてみようと思う。人は何のために働くのか。やりがいのある仕事とは何か。経済学では労働は不効用をもたらし、それはお金によって埋め合わされる。しかし、労働そのものが不効用だけでなく効用をもたらすことを私たちは経験則から知っている。自分の仕事に役に立っていると実感する時の喜び、自分の成長を感じる時の喜び。これらはまぎれもなく効用である。目にみえない報酬ともいえる。

では、今日の日本において労働の効用・不効用はどのような関係にあるのだろうか。仮に仕事による疲労(不効用)が一定とする(肉体労働が減り肉体的な疲労は減っている一方で感情労働が増えて精神的な疲労

が増している)。統計が示しているように報酬(効用)は減っている。そして、ここからが本題なのだが、労働そのものから得られる喜び(効用)も昔と比べて減っているのではないだろうか。資本投入量の増加により労働生産性が上がり、私たちの暮らしは豊かになった。その一方で、工場化により仕事は標準化され、顔の見えない消費者のためにラインに並ぶ労働者が増えた。サービス業では、ＩＴのおかげで多くの仕事に標準化され、そういう仕事は正社員に代わって「安上がりの」非正社員が担うことも多くなった。標準化されるといことは、工夫の余地が少なくなるといことで、つまり、やりがい薄れる。また、非正社員は差別的な報酬を受け取っているだけでなく、企業から与えられる訓練も少ない(平均で正社員の半

分)。公共職業訓練が少ない日本では非正社員は報酬も成長の機会も少ない。正社員においては人員削減で労働負荷が高まる一方で報酬が下がっている。まとめると、労働の不効用はそのまま効用は大きく下がっている。理論では不効用が効用よりも大きい場合は就業をしない。しかし、現実には違う。生活のために働かざるをえない。これが若い人たちが感じている陰鬱な労働観の正体だろうか。

企業は従業員に対して労働に見合った報酬、適度な休息、そして、働きがいのある仕事を与える社会的責任がある。すべての労働者は仕事を通じて喜びを感じ、成長する権利を持つ。コスト削減による競争だけではなく、雇用の質を高めて生産性を上げて競争力につなげる、そんな発想が日本企業に求められる。■